

千 玄室著「国境を越える一盃(いちわん)のお茶」

外交(DIPLOMACY)第2巻外務省2010年10月30日刊を読む

国境を越える一盃のお茶

1. 戦いに敗れ、海軍から復員して家に帰ると、既に米国の進駐軍軍人がジープを連れ、私の家を訪れていた。1945年10月ごろ、私は父である家元が軍人たちを茶室で指導している姿を見て驚いた。父は同志社英学校卒業であったために英語ができた。窮屈な格好で一盃のお茶を頂く将校たちに私の心は動揺する。敗れた国の伝統文化を見学に来た米国とは一体何だろうか。聞くと、司令部からの「出来得る限り日本の伝統文化に触れ、日本人を理解するように」との指示によるとのことであった。その時、これからは茶道をもって文化交流をし、そして少しでも平和のために寄与しようと誓った。縁があり、私は1951年1月、まだパスポートがないので司令部CIE発行の身分証明書を持って訪米したのだが、世界へ一盃のお茶の心を紹介し、日本を理解してもらう始まりとなった。民間外交といっても決して過言ではない。すべてが自費で、時には文部科学省や外務省の外交文化使節の名称のもとに米国や他の諸国を訪れ、幸いつつがなく茶道の心「和敬清寂」の意義を、一盃を通じて紹介してきたのである。和は平和調和、敬は真の敬い合う差別のない人間関係、清は自己の心を浄め相手に接す、寂は終わりなき未来への心構えである。つらく苦しいことも多々あったが、異国人の、他国の文化を知ろうとする熱意は大変なものであり、その熱意が私に力を与えてくれた。迎合するのではなく、何時も真の茶道をもって日本のために役に立つようにと心掛けたのである。50年余の歳月が流れ、パスポートも何十冊にもなり、訪れた国は60カ国、渡航も300回以上にもなった。
2. 35年前から請われて外務省研修所の外来講師として年2回講義に出ている。外交官を志す人や、各省からの出向者が対象だが、4年前から茶道を課外課目に取り入れてくださったので、大方の人が茶道を短期間だが学んでおり、少しでも外交上に役立つよう指導させてもらっている。成果はそれなりに上がっている。何しろ諸外国では、私の蒔いたお茶の種が実り育ち、各地に茶道協会が設立され、多くの外国人が茶道を学んでいる。一盃のお茶が人類の平和と繁栄の思想にピッタリであり、また精神に安定を与えることから、差別区別なく国境を越えて広がっていく。私は各国の首脳・経済人・学者・文化人など数多くの方々と知り合い、またヴァチカンでは法王様に、そして各宗教の聖地で平和祈念のお茶を捧げ献じてきた。
3. 1947年に財団法人日本国際連合協会が設立され、1965年の初めごろ、私を理事にという推薦を頂いた。その御縁が2002年10月に小坂善太郎元外務大臣の後任の会長を、と当時の小泉総理や川口外務大臣の推挙でお務めすることとなった。また2005年9月より当時の町村外務大臣より、日本・国連親善大使の任命を受け、今日に至っている。茶道の一盃の平和の精神が、いささかでも民間外交に役立てさせていただいているということで、ありがたくその任務に取り組んでいる。

- 4 . 日本も随分前から観光立国の構想を打ち立てているが、相変わらず来訪者が少ない。2009 年は 700 万人を切っている。これを何とか年間 2500 万人にと、国土交通省観光庁の誘致作戦が立てられた。そこで海外各国に長年にわたり茶道をもって日本文化の紹介に努め、その存在感も大きくなった私たちに何とか協力をということだった。そして本年 4 月 1 日付で国土交通省より日本国 観光親善大使をお受けした。多い年には 16 回も渡航し、日本精神や文化紹介に努めている。
- 5 . 政府の外交政策に口を出すのではないが、どうも政策が弱腰でまとまりがないように思われる。一日も早く、普天間基地問題の解決や日米安保の見直しなどを進めていただきたい。そのためには海外から信頼されるようなリーダーシップを発揮する外交政策を、広い人材の起用で取り組むことが重要な課題であろうと思うのである。

P4 ~ 5

[コメント]

一人の民間人がどこまで外交に関与できるかは非常に興味あるテーマだが、千玄室先生は最も熱心に、また、最も意義深く日本の外交のために尽くされた民間人のお一人であることは、この文章からよく理解できる。日本人のアイデンティティの一つである茶道の心の素晴らしさ、普遍性を再認識させていただいた。

- 2010 年 10 月 30 日 林 明夫記 -